

〈書評〉

ベルナール・グネ著（佐藤彰一・畑奈保美訳）

『オルレアン大公暗殺－中世フランス政治文化－』

（岩波書店，2010年7月，xiii＋396頁＋32頁）

上 田 耕 造

「一つの死，一つの社会－1407年11月23日オルレアン公暗殺－*Un meurtre, une société : L'assassinat du duc d'Orléans, 23 novembre 1407*」。原著の表題はこうである。グネがこの著作で描き出そうとしたのは，まさにオルレアン公の暗殺事件に象徴される中世後期フランスの政治社会である。

グネがパリ第一大学の教授として教鞭をとっていたのは，アナール学派が活躍する時代であった。政治史や事件史が歴史の片隅に追いやられる時代を経験した後に，著者は改めてオルレアン公暗殺という，フランス史における一つの事件を扱う。しかし，様々な経験を経て紡ぎだされたこの作品は，単なる政治史の叙述に収まっていない。本書の内容は国制史や社会史など，あらゆる分野にわたっており，政治史と構造史の融合，いわばアナール学派の進化を表現しているといえる。

目次を開いてみると，グネが目指した新たな歴史研究の方向性を垣間見ることができる。各章と節の題目を一瞥すると，身分制社会に関する論説から，社会史へと展開する中世後期の「秩序」と「無秩序」に対する考察，さらには，教会史や法制史に繋がる暗殺の正当化論争，そして当然，暗殺事件を中心とした政治史の話が詰め込まれていることがわかる。グネは，なぜオルレアン公暗殺事件が起きたのかを追求するだけでなく，15世紀の初期に起きた残虐な事件を通して，社会の相貌や趨勢，すなわち事件にまつわる構造史を描き出そうとしたのである。まずはグネの仕事を具体的に見ていこう。

導入部分である「序」は，1407年11月23日夜の出来事に関する描写から始まる。目撃者の証言などから再構築されるヴィヴィエイユ・デュ・タンブル通りでの惨状，事件後のブルゴーニュ公ジャン無畏公による自白，暗殺事件に対する諸侯たちの反応，そして暗殺事件がもたらす社会への影響に関する記述は，読者に事件の場景と当時の時代背景を思い浮かばせる。その後，グネは暗殺事件が引き起こされた社会とは，どのようなものであったのかを述べていく。

君主が「頭」で，「貴族と騎士」は「腕と手」，「平民全体」は「腹，脚，足」であり，各身分が，それぞれの役割を果たすことで成り立つ三身分制の「政治体 *corps de police*」。これこそグネが想定する中世後期のフランス社会であった。君主，すなわちフランス国王は，大権と聖性を兼ね備えて身分ヒエラルキーの頂点に立つ。「貴族と騎士」身分は大貴族から騎士 *chevalier* や貴人 *gentilhomme*，さらには宮内官まで多種多様な人々によって構成されている。貴族階級で最上位に位置するのが大貴族だが，その中でも国王と血縁関係にある諸侯たちが，この身分のトップ

に君臨する。そして、王太子を先頭に、国王と近縁にあるおよそ30人の君侯が、実際にフランス政治社会を動かす原動力となっていた。大貴族の下に位置する騎士や貴人は、社会の基調をなす存在とされ、実際に政治体の為に体を動かすのはこの身分の者たちであった。階級の最下部に位置づけられるのが、商人や農民などを含んだ平民身分であるが、当時彼らこそが王国の人口の大部分を占めていた。「政治体」の土台となり、貴族や国王を支えていたのは、この身分の者たちであった。

身分ヒエラルキーは、それぞれの身分に応じた衣装や生活、そして慣習や礼儀によって明確に区分されていた。例えば、深紅の羅紗地マントは貴族の象徴であった。また、挨拶をするときの体の屈め方や膝のつき方などは、階級によって異なり、さらには各身分には、それにふさわしい徳目があった。階層社会に属する人々は、感覚的または視覚的に他の階級を意識し、翻って自らの階級を認識する。身分ヒエラルキーは、様々な要素が積み重ねられることで成り立っており、中世後期フランス社会の秩序は、こうした階層社会の中で保たれていたのである。

しかし、よく秩序づけられた社会というのは、あくまで理想であり、その中には、多くの例外とともに無秩序が広がっていた。^{フォルトゥーナ}「運」はまさに秩序を乱すものの象徴である。「盲目のフォルトゥーナ」は、身分を問うことなくあらゆる人々に降りかかり、高き者を陥れ、低き者を高める。また、人間の欲は秩序を蝕んでいく。自らの利益を追求する傲慢や強欲、そして貪欲は、他人を貶め、最終的には罪を導くことになる。罪は恨みと復讐をもたらす、さらには暴力を生み出す。欲から始まる負の連鎖は、社会を不安定な状態へと陥らせるのである。

秩序を乱す負の連鎖を断ち切り、安定した社会を取り戻すため、中世後期のフランス社会では多様な緩和策が用いられていた。最も友好的な手段は司法なのだが、当時その機能は不十分であった。裁判によって導かれる判決には、絶対的な強制力はなく、未だ私戦は貴族の権利として残されていたのである。司法の役割を補い、なおかつ私戦に至る状態を回避するために用いられたのが同盟と誓約であった。姻戚関係の構築は一つの同盟手段であったが、血の繋がりでだけでなく、宣誓にもとづく契約は、罪を犯すことを予防し、さらには暴力がもたらす復讐の感情を緩和する手段でもあった。しかし、二つの手段は、あくまで個人の意思による繋がりでしかなく、完全なる秩序をもたらすまでには至らない。様々な手段によって繕われただけの秩序は、すぐに破綻する可能性を秘めていたわけである。

以上がグネの提示する中世後期のフランス社会であるが、彼は罪と暴力に対して寛容であった社会が、事件を生み出す土台となっていたことをここで示唆する。そしてフォルトゥーナは、誰の身にも降りかかることから、オルレアン公暗殺事件は、起こるべくして起こったというわけである。

事件が引き起こされる基礎の部分の部分を明らかにして、作者は次に具体的にオルレアン公暗殺事件の原因と結果を探っていく。まずは事件現場の解明から始まる。

殺害が行われたのは、パリ市内の一角ヴィヴィエユ・デュ・タンブル通りである。パリは中世後期のフランスにおいて、政治の中心地であった。これまでの国王と異なり、シャルル6世はパリとその周辺の居城に多く留まるようになっていた。当時、国政は国王の傍で行われていたこ

とから、実質パリが政治の場となる。すると、諸侯たちも国政に参加するため、必然的にパリに滞在することになる。

先に述べた30人の君侯を始め、多くの貴族身分の者たちが国政に参加すべく、パリに集結する。そこに様々な政治的意思が渦巻く「宮廷」が形作られることになる。国政の主導権を握るため、あるいは多くの利益を国王から引き出すために、宮廷では、明に暗に様々な形で権力争いが行われるようになる。宮廷の政争で主役を演じていたのが、まさにオルレアン公ルイとブルゴーニュ公フィリップ豪胆公、そして息子のジャンであった。当時のパリは権力闘争の中心地であり、その延長線上で暗殺事件は引き起こされることになる。

パリという暗殺現場の状況を解明した後、著者は事件の動機を詳細に検討していく。オルレアン公とブルゴーニュ公は、様々な点で利害が対立していた。一つ目は教皇の選出に関してである。当時は教会大分裂の渦中にあり、二人はそれぞれ擁立する教皇が異なっていた。二つ目がフランス東部、神聖ローマ帝国との境界線に位置する所領に関する問題であり、両者ともに、この地に新たな新境地開拓を目指していた。三つ目は宮廷内における権力争いで、人事権の掌握と財政権の取り合いが二人の間で繰り返されていた。

以上に挙げた実利的な対立とともに、身分ヒエラルキーでの立場の違いと人格の違いがさらなる対立を生み出す。王弟であったオルレアン公ルイは、従兄弟であるブルゴーニュ公ジャンに比べ明らかに王位継承順位が上であり、階級も上位に位置していた。一方、ブルゴーニュ公ジャンは、父から受け継ぐ諸侯筆頭という地位を持つも、やはり対立するオルレアン公ルイには及ばないという歯がゆさを抱いていた。こうした妬みはさらに憎しみを生み出し、ブルゴーニュ公ジャンに最後の一线を踏み越える決断をさせる。両者の政治的野心がもたらす対立は、劣等感から生み出される負の感情と相まって、敵意を生み出す。そして感情の高ぶりは、ブルゴーニュ公ジャンの背中を後押しする。暗殺事件は入念に練り上げられ、1407年11月23日の夜にパリの片隅で実行に移されるのである。

ここまでがグネが行った政治史の手法による暗殺事件の分析である。次に作者は、事件がもたらしたその後の影響に関する考察に取り掛かる。事件の直後から、ブルゴーニュ公ジャンによる、事件の正当化と自らの地位を確保しようとする動きが始まる。パリ大学の教授であったジャン・プティは、ブルゴーニュ公ジャンからその仕事を一任された。彼は公のパリ帰還とともに弁護を始める。プティの論説の根幹は、要するにオルレアン公ルイは暴君であり、社会の混乱をもたらしていた張本人で、秩序の回復の為に彼の殺害は必要不可欠であったとする点である。生前のオルレアン公ルイは確かに勝手に徴税を行い、パリ市民を圧迫していた。それゆえ、パリの人々は少なからず、オルレアン公ルイを憎んでいたわけであり、ブルゴーニュ公ジャンの入城を「ノエル」の掛け声とともに迎えたのである。つまり、プティの論説はある程度効果があったといえ、さらには諸侯たちの危機回避の感情も働き、最終的にはシャルトルで、諸侯ら列席のもと新たにオルレアン公となったシャルルと、ブルゴーニュ公ジャンとの間で和解が成立することになる。

オルレアン公が暗殺されてから5年が経過した1413年。事件はジャン・ジェルソンによっ

て、再び歴史の表舞台にあげられる。彼がジャン・プティの弁論に疑問を呈したことから、再び論争が始まるのである。犯した殺害の罪は、如何に暴君といえども許されることがあるのか。議論の焦点はこの点であり、法学あるいは神学の分野から多様な見解が述べられる。しかし、結局は今現在ある平和こそが尊重され、ブルゴーニュ公の名誉がジェルソンらの真理を跳ね返すことになる。

暗殺事件の真理を巡る論争は、これで一旦、終息するのだが、その影響は深く対抗者の心理の中に刻まれていた。オルレアン公シャルルの義父であるベルナルド・ダルマニャックは、ブルゴーニュ公ジャンへの敵対心を引き継ぎ彼との政権争いを続ける。アルマニャック派とブルゴーニュ派とのバリを中心としたせめぎ合いは、最終的に1407年の事件と全く反対の事態をもたらすことになる。復讐心は再び越えてはいけな一線を踏み越えさせる。1419年9月10日モントロでブルゴーニュ公ジャンはアルマニャック派の者たちによって殺害されるのである。

グネのオルレアン公暗殺事件に関する考察は、復讐劇をもって終わる。最後に付けられたエピソードでは、その後フランス王国が辿る厳しい道のりが綴られるとともに、危機を乗り越えた後、新たな展開を迎える王国の姿が描かれている。

「王国の構造では解決できない問題を、オルレアン大公の謀殺は浮かび上がらせたのである。悲嘆と暴力のうちに一つの世界が崩れ落ちた。確かに、こうも高くついた経験から、ある日、以前よりも確かな構造のもとに新たなフランスが生まれることになった。この惨劇が引き起こした論争には豊かな未来があったのだ。」(372頁)

以上の言葉でグネは本論をまとめている。本書の目的、展開、そして結末はまさにこの文章に凝縮されているといえるであろう。オルレアン公暗殺事件を通して、中世後期の社会構造を明らかにし、その転換を事件の原因、経過、結果の考察とともに見るのである。

グネの仕事は緻密であり、様々な知識と史料を用いて考察を進めていく。一つの事件を中心に、あらゆる分野に検討を進めていくことができるのは、グネが持つ幅広い視野と知見があってこそのものであろう。最後に、グネの論説を補い、中世後期のフランス社会をより鮮明に描き出すための論点を以下にあげておきたい。

シャルル6世の伝記を著するフランソワーズ・オトランは、オルレアン公ルイの暗殺とブルゴーニュ公ジャンの暗殺という事件に印象づけられ、過小評価されるこの国王の治世に対して、再評価を加える。彼女はこの混乱の中にこそ王国の発展があり、パリにおけるガリカニズムの萌芽や宮廷文化の形成は、それを象徴するものであるとする⁽¹⁾。グネも最後の言葉で述べているように、この混乱の時代の中では、成長に向けた様々な土台が築かれたのである。そこで、グネもオトランも注目するシャルル6世治世の宮廷には、どのような人物がおり、また彼らはどのような経歴も持った人々であったのかという、プロソポグラフィックの研究を加えることで、当時の政治社会の状況とその変化をより具体的に描き出すことができるであろう⁽²⁾。

暗殺事件の主役はオルレアン公とブルゴーニュ公であった。そして、本書の内容は、この二人の人物を中心に展開されていく。しかし、この時代を、脇役の視点、つまり他の諸侯の視点を通して見てみると、これまでとは異なる社会像が見えてくるのではないだろうか。というのも、事

件が衝撃的であるがゆえに、オルレアン公とブルゴーニュ公の行動に眼を奪われがちだが、国政の場にはその他にもベリー公がおり、アンジュー公そしてブルボン公がいた。彼らも顧問官として国政を担う役割も持っていたわけであり、さらにいえば、彼らの存在なくして「政治体」は機能しなかったともいえるであろう。なぜなら、ブルゴーニュ公がいかに権力を掌握しようとも、一人では王国を動かすことはできないはずだからである。つまりは、その他の諸侯、あるいは大貴族にも国政を左右する可能性があったわけである。その可能性を検討することで、より明確に当時の政治社会が浮かび上がってくるのではないだろうか⁽³⁾。

1407年11月23日は「フランスを作った30日」叢書には入れられなかった。それならフランスを解体した10日の中に置かれるべきだろうとして、グネは本書を締めくくる。訳者である佐藤氏はここに、解体と創造は表裏の関係にあるという著者の歴史観を見る。著者の見解を踏まえ、さらに深読みすれば、作成にかかる日数が30日に比べ、解体にかかる日数が10日であることは、後者の方がより社会に与えるインパクトが大きいわけであり、作成の30日の一事件よりも、解体の10日の一事件の方がより注目に値することを著者はここで示したかったのではないだろうか。本書はその重要性を十分に伝えてくれる。

注

- (1) Françoise Autrand, «Le règne de Charles VI : un mauvais souvenir?», dans F. Autrand, C. Gauvard et J.-M. Moeglin (éds.), *Saint-Denis et la royauté*, Paris, 1999, pp.13-22.
- (2) 例えば Alain Demurger, «Guerre civile et changements du personnel administratif dans le royaume de France de 1400 à 1418 : l'exemple des baillis et sénéchaux», *Francia*, N°.6, 1978, pp.151-298 は、バイイ・セネシヤル職の人事に注目している。
- (3) ベリー公に関しては Françoise Autrand, *Jean de Berry : l'art et le pouvoir*, Paris, 2000, ブルボン公に関しては Olivier Mattéoni, *Servir le prince : les officiers des ducs de Bourbon à la fin du moyen âge, 1356-1523*, Paris, 1998 が参考になる。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程修了)